

ふたりの先輩の言葉

法律事務所職員

鈴木 清子

事務所に待望の新人事務局員が採用され、2月から元気に働いている。指示されると気持ちの良い返事をし、わからないことは率直に聞いてくる。こちらもテキストには教えられないし答えられない…と身を引き締めている。自分にもそんな時期があった。

コミュニケーションが一番大切

彼の歓迎会の場で、事務局から一言と突然指名された先輩が話した。「ミスは隠さずに報告すること。誰でも間違いは起こします…特に初めのうちは。最終的な判断は勝手にしないで、先輩事務局や弁護士に報告して判断を仰ぎましょう。みんながあなたのカバーをしてくれます。一緒に仕事をする仲間だからこそ、コミュニケーションが一番大切です。」

私が入所した時、その先輩はすぐに産休に入ってしまうけれど…と受付業務と資料の取り寄せなどのレクチャーをしてくれ、最後にやはりそう話してくれたことを思い出した。

長く同じ環境で働いていると、怖い“慣れ”が生じてくる。内勤から外回り中心になどと業務が変われば“新鮮味”はある。しかし、日々の挨拶や仕事を手伝ってくれたことへの感謝の言葉などはどうだろうか。「一緒に働く仲間」としての気持ちの大切さを改めて思い起こさせてくれる良いきっかけとなった。

冤罪事件との出会い

十数年前、他の法律事務所のベテラン事務局の方の話を聞く機会があった。失敗談などを織り交

ぜながら、私たち事務員が弁護士業務にどう関わって仕事をしているかという講演だった。夜の懇親会の場で、その方は、日弁連も支援している名張毒ぶどう酒事件の奥西勝さんの話をした。冤罪を訴え続けている無実の死刑囚という、自分たちが生活している空間とは全く別の世界の話のようで、それなのにまるで自分の身内のことのように話す熱い語りに、その場にいた数人で奥西さんが冤罪ならば助けだしたいと思った。弁護士ではない私たちに何ができるのだろうかと思ったが、その後弁護団を講師に学習会を開き、現地調査に行き、冤罪だという確信を深め、支援する会をつくった。この事件をひとりでも多くの人に知ってもらうため、街頭宣伝や署名・学習会を行ったり、裁判所や名古屋拘置所に要請に行ったりと、現在では私のライフワークとなっている。

名張事件は残念ながら昨年末、名古屋高裁で再審開始決定が取り消され、現在最高裁で特別抗告中である。『無実のものは無罪に』という当たり前の司法判断がなされるよう、毎月第3木曜日正午から弁護士会館前でも宣伝をしている。事務所のある錦糸町駅前では、先月仕事が終わった夕刻、支援する会の仲間たちと街頭宣伝をした。事務所の先輩たちも、新人事務局員の彼も手伝ってくれた。「ありがとう!!」

* * *

法律事務所という場所で、仕事を始めた頃の真摯な気持ちを思い出す。これまでの様々な悩みも、多くの人との出会いの中で励まされ働き続けてこれた。その思いを心に置きながら、これからもこの職場で仕事をしていきたい。

★名張毒ぶどう酒事件・奥西勝さんを守る東京の会
<http://www5a.biglobe.ne.jp/~nabari/>